

在アテネ・イギリス研究所と博士課程教育支援

キャサリン・モーガン
(周藤芳幸・長尾美里訳)

在アテネ・イギリス研究所所長
ロンドン大学キングスカレッジ教授

はじめに

この講演では、在アテネ・イギリス研究所(The British School at Athens, 以下 BSA と略)について、その活動内容をお伝えするとともに、変動する昨今のイギリスにおける博士課程教育との関係について紹介したいと思います。名称に School とは付いていますが、アメリカやフランスのスクールと同様、これは高等学校や1年単位の教育プログラムがあるような学校ではなく、ギリシアに関するあらゆる人文学に携わる博士課程の学生や、博士号を取得した研究者の調査をサポートする施設です。ですから、研究所の会員層は、PhD 候補者から退職した教員まで様々で、彼らの研究分野も言語学、人類学、政治学、芸術、そして言うまでもなく考古学など、多岐に渡ります。研究所では、調査を行えるよう個人の会員に施設を提供し、さらに少なくとも2つの研究員ポストを毎年設けています。1つはアシスタント・ダイレクターという、オックスフォードやケンブリッジの若手奨励研究員と同等の肩書きに管理上の義務が加わったもの(このポストは現在世界的に活躍するイギリス人教授のキャリア

形成においてとても重要なものとなっています)。そしてもう1つは、大学に赴任したばかりの若手研究者に対し、ギリシアでの滞在を支援するもの。また、あらゆる人文学分野のベテランの教員に対しては客員研究員、そして考古学に関しては上級研究員といったポストを設けています。同時に、1986年に同研究所設立100周年を記念して設立された基金によって、ギリシア国内の考古学機関に勤めるギリシア人やキプロス人の若手研究者をイギリスに短期間派遣する奨学制度もあります。

BSA の活動目的は、国籍を問わずイギリスを拠点とする研究者であれば誰もが、各自の調査・研究をできるだけ円滑に行えるように支援することにあります。この時、実用的な施設をもつことが重要となります。ギリシアでは、BSA のような施設が現地調査の申請権と研究許可を有する外国の研究機関として認知され、外交上または(ギリシア政府から多額の税を課せられないために)公益上の身分をもつものとみなされるために、施設を維持し研究所に常に居住する代表者、つまり私のようなダイレクターをおくことを法律で定めています。



実は、1886年にアテネ中心地の小さな邸宅に研究所が作られた頃は、教育のみを目的とした建物を作るという名目でギリシア政府から土地を与えられていました。その後、研究所の敷地内に、宿泊施設と最大25名までが長期・短期滞在できる別館（さらに100名以上の会員がアテネ市内で生活し、彼らの研究拠点として研究所を使用しています）も建てられ、別館にはコミュニティーの中心となる談話室も備えられています（当初この部屋は1905年に研究所の図書室として建てられました）。さらに図書室と文書室、考古資料整理室、博物館などがあります。創立当初の研究所の建物は、現在レクチャーやセミナー用の部屋として使用されています。

しかしこのような設備が重要であることはもちろんですが、研究所の真の関心は、活気ある国際的なコミュニティーを作ることにあります。なぜなら、国内外のつながりなくしてイギリスの研究が一流にはなりえませんし、若い研究者たちはこの点を頭で理解するだけでなく、実際に自分たちのキャリアのできるだけ早い段階で、こうしたつながりを作る機会を与えられるべきであると私たちは考えているからです。ですから、一方で、イギリス本国の支援者に対し研究所が負うべき責任として、イギリスを拠点とする研究であることを強調しなければならないのですが、実際のところ、私たちはこの研究所を引き続き多くの研究者に開かれた、国際的な場所であるよう努めていきますので、日本からも関心が寄せられることを願うと同時に、ここ何年も多くの日本人研究者を受け入れてきましたので、こうした傾向がこれからも続くことを望んでいます。また、日本の若い研究者たちが、異なる研究アプローチに触れるために欧米に渡るか、それとも地中海で一次資料に接するべきか、その選択に悩むと聞いています。この点についても、われわれの研究所ではその両方を提供することができるでしょう。さらに、長らく日本が自国の研究所をアテネに設立することに関心をもっていることも承知しています。そのためここでは、歴史も古く規模の大きなこの研究所が、他の小規模で新しい研究所とともに、もちろん発展的な共同作業を目指しているわけですが、どのような活動を、何を目的に、どのように取り組んでいるのかについて検討したいと思います。現実的に言えば、アテネの不動産価格と現在の経済状況を鑑みると、昨今の金融危機以前から、新規の研究所がこれまでの研究所（イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ）と同じ規模のものを運営することは難しいといえます。例えば

図書館1つ建設することも一大事です。しかし、アイルランド、カナダ、フィンランド、最近ではグルジアといった比較的新しい研究所が、さまざまな方法でこうした問題に取り組んでいます。例えば、文化外交として少人数の使節を派遣したり、大使館と連携して自国の文化を紹介したり、または特定の学術的関心を強調したり（グルジアの場合は、ビザンツ研究の中心となりつつあります）、資料を共有するために共同で活動したりしています（北欧諸国のネットワークはいい例です）。部分的には、このようなアプローチは資金源が政府からなのか、大学コンソーシアムからなのかによって左右されますが、このような多くの海外活動の運営方法には考えさせられるところが多々あります。

研究所の運営組織

次に私たちの研究所の支援構造について説明しましょう。イギリス研究所は、1886年に大学連合と個人的な支援者によって独立した慈善団体として設立されました。第2次大戦前から政府資金を得ることができるようになり、現在ではこれが研究所の年間予算の約6割を占めています。この予算は、イノベーション・大学・職業技能省からイギリスの学士院に渡り、さらに海外の研究施設と学術団体に配分されます。学士院は15の研究施設を運営しており、うちロンドンに拠点を置く9つの施設に対しては特定の分野の研究（イラク、リビア研究など）を行う資金を提供します。一方、残りの6施設は海外に拠点をもちます。アテネとローマの研究所がもっとも大きなもので、ついでレバント（アンマンとエルサレム）、そして規模は小さなものですが、アンカラ、テヘラン、ナイロビにもあります。学士院がこれら15すべての施設に対して支払う金額は4百万ポンドで、同レベルのドイツの考古学研究所が連邦政府から4千万ポンドを受けていることと比較すると絶対的に少ないといえます。しかし、BSAの予算の大部分をアテネが担っているため、先述したように、収入の6割が政府からの予算となるのです。私たちは毎年この予算を獲得するために申請をしなくてはならず、そこで調査の規模やインパクト、そして、膨大な業績指標（図書館の稼働率、宿泊施設の使用率、会員の国籍と所属、研究分野など）を使って研究所の業務内容について明示しなくてはなりません。さらに、5年ごとに全体的な監査を受けます。ですから、大学や大きな美術館といったより幅広いアカデミック・コミュニティーのニーズを認識し、

それに応えることに細心の注意を払っています。そしてこのことは、年々厳しくなるイギリス慈善事業委員会からの要求、すなわち、研究所の目的を明確にし、そこからどのような人々が恩恵を受けるのかを明らかにし、そして彼らのニーズに応えよ、という要求をも充たすことになります。そのため、私たちはとても厳しい規制の枠のなかで運営しています。しかし、それにもかかわらず、アテネにある他国の研究所と異なり、イギリス研究所は政府の機関ではありません。2003年まで、ダイレクターには外務省から文化大使としての身分が与えられていました。この制度は政府の外交リスト見直しによって終了しましたが、ギリシアのように文化を極めて高く評価する国においては、私たちは大使館やブリティッシュ・カウンシルとの継続的な連携が重要であると認識しています。正式に認定こそされていませんが、私も文化大使としての業務は継続して行っています。

6つの海外の研究機関は、それぞれ違った歴史を持っています。BSAは1886年に、ギリシアの独立運動を支えたイギリスの熱狂的なギリシア愛好運動の1つとして登場しました。そして新たに広い領土をもったギリシア国家が生まれたことで、辺境地帯においても広範囲の調査を安全に行うことが可能となりました。また、研究所設立の背景にはフランス（フランス研究所は1847年に設立）、ドイツ、アメリカといった競合する国への対応という側面もありました。またローマでも状況は同じで、研究所はイギリスの芸術教育への特別なニーズに応える場でした。このような国家主義的な利害関係は長期にわたって存在し続け、アテネにある他国の施設と共同作業をしようと真剣に取り組み始めたのは、実はここ数年のことに過ぎないのです。対照的に、アンマンとエルサレムにある研究所は、2つの世界大戦の間に行われたレバントの発掘調査時に設立され、そして、ナイロビにあるもっとも新しい東アフリカの研究所は、ダマスカスとフランス語圏アフリカのフランス研究所とより緊密な協力関係にあります。そして、ここでの研究関心は、かつての植民地時代の地理からはっきりと決まってきます。概してイギリスの海外の研究機関というのは、植民地主義や世界的な政治見解などに基づいた関心に突き進む傾向があったという事実からもわかるように、現在では意外に思えますが、過去の政治的状況という観点からも近隣諸国での調査とは決して無関係ではなく、それを引きずってきたのです。ですから、BSAではキプロス調査の責任を負い、黒海の調査はアンカラと協力し、パ

ルカン研究に関する膨大な書籍や、第1次大戦中にイギリス軍がマケドニアで行った考古学調査に関する重要な文書を所有しているのです。つまり、BSAは非常に個性的で、少し変わった歴史をもっていますが、この点が他の中央集権化されたヨーロッパの国々の施設と大きく異なっているところだといえるでしょう。

イギリスにおける博士課程教育の変化と研究所の対応

次に、私たちの活動内容と最近の調査について詳しく紹介する前に、イギリスの高等教育、とりわけ博士レベルの教育がどのように変化しているのか（というのもこの変化は私たちの新たな活動のありかたについても考える背景となっていますので）という点について簡単に触れようと思います。1960年代の大学セクターの拡大までは、博士課程修了後の教育はとても気楽なものでした。PhDは大学教員のポストには必要ではなく、むしろ重要であったのは経験の深さでした。第2次大戦までのBSAの審議報告からもこの傾向は裏付けられます。つまり、当時の研究所は、若い研究者たちがギリシア国内をまわって、発掘現場で経験をつむことができるよう手助けするために存在しました。ごく限られた期間に特定の研究課題にのみ取り組むというのは、博士号を重要視する中で出てきた傾向です。しかし、おそらく一番大きな変化は、この10年で起こったボローニャ・プロセスへの調印によるものでしょう。学士から博士までの高等教育を10年と設定し、ヨーロッパ国内の学生の流動性を促すために、学士、修士、PhDの段階をヨーロッパ国内で統一させ、1つのヨーロッパ水準を作ることにイギリスも参加したことによる変化です（理論的には、各段階で何が達成されるべきであるのかに関する協定ですが、博士号のレベルに関しては依然として問題が残っています）。この計画では、人文系よりは自然科学系からの要請によって博士課程は3年（最長でも4年）と設定されています。最大4年のカリキュラムは、通常では無理というわけではありません。実際、博士課程の学費を考えてみても、望ましいものと思えます。しかし、状況を困難にしているのは、目標値を下回る機関や大学に対しとても重いペナルティーを課す政府と研究評価委員会のアプローチです。大学側は、博士課程の学生に対し、研究課題を限定させたり（そのために、学生は新たな言語の習得や海外で一次資料に触れて予測できない状況に出会うことを避けるようにな

ります), 年に1度, 時には半年に1度のペースで中間報告を課したりします。担当教員は, 自分たちの学生が海外に目を向けるよりも, 大学内で研究することを好ましく思うようになっていきます。そのためBSAは, 学生の期待に沿いながらも, 担当教員と共に学生の研究計画に合うように研究施設を維持するという困難に直面しています。若い研究者を“育成”することよりもむしろ, 制約のある論文スケジュールをもった学生を受け入れて論文の完成を手助けする一方で, 彼らに新たなアイデアや資料を提供したいのです。研究所のEarly Career Fellowshipの最近の傾向では, PhDの学生のギリシアでの滞在日数は, 大学を修了して職に就くためには必要だと私たちが考える期間よりも短くなっています。こうした学生にとって, 奨学金などのサポートがなければ, 海外での研究は手が出ないほどコストのかかるものになると思われますが, 私たちも彼らと連携してこうした状況に対応しなければなりません。そのためにも, 博士号取得候補者たちへの支援の仕方や, 研究所が提供する助言や干渉のレベルについて再考しているところです。

先に述べたように, BSAには1年単位の授業プログラムはありませんが, ターゲットを絞った短期間の講座を設けています。こうした講座も, 新しいニーズに応えたものになるようその性質を変えてきています。30年近く, 30名までの学部生を対象に, 実際にBASの博物館が所蔵する遺物を扱うことと各地の遺跡の見学とを組み合わせたサマースクールを毎年開いています。このセミナーは, 2年次に参加することが理想的で, ここでの経験が後に生かされ, 学位の成績にもいい影響を与えますし, この点においてコースの成績は優秀な指標でもあります(コースに参加した学部生はより上の学位を取得する傾向があります)。さらに, BSAでは古典を扱う高校の教師を対象に2年に1度のプログラムを実施しています。25年前にこのコースが創設された頃は, もっぱら私立・国立高校のラテン・ギリシア語教師が参加していましたが, 今日では他の学科の教師も授業で古典を扱う教師も同じように支援しています。そして, 彼らが生徒をつれてBSAを訪れる際には, ちょうど私が古典研究者と古典についてディスカッションするのと同じように, 現代ギリシア語コースの学生には, 私自身も海外で第2外国語を使って働く経験を語ることもありますし, 文化的な事柄に関心のある自然科学専攻の人にはBSAの実験室を見せたりしています。博士課程レベルでは, BSAの奨学金審議委員会の母体であるResearch

Councils UKによる決定で, 博士課程の学生に対し技術訓練のための奨学金を与えるという大きな進歩がありました。それに応じて, 私たちは, 一部の学生にとってはとても素晴らしい制度でしたが締め切り重視の者にとっては法外に長く費用もかかる大学院生用の長期滞在プログラムを終了させ, 代わりに2〜3週間の短期の集中講座を開設しました。今年は, 基本の碑文研究コースを開講し, 来年はギリシア・ローマの土器研究, 貨幣研究, 資料分析を実験室で教える予定です。このように, BSAでは学生に対して, 彼らが必要と感じたことを可能な範囲内で提供し, 昨今の博士課程の変化によって生まれたイギリス国内の新たな技術ギャップを埋めるため, 私たちもある程度の責任をもって介入し, そして他の国の学生に対してもより幅広く何らかの形でサポートしています。ですから, 海外の研究機関として効率よく運営していくには, 物事にとても柔軟に対応しなくてはいけませんし, イギリス国内の変化についていかななくてはならないのです。

研究所のリソース

それでは次に, BSAの施設と近年の研究活動について詳しく紹介しましょう。まず, 図書室は私たちの研究所の中心的な施設です。ここでは, あらゆる分野について基本的な研究レベルをカバーするべく, BSAの会員が利用できる近くのアメリカの研究所と協定を交わし, 蔵書を有効利用できるようテーマの焦点化をはかっています。現在, オンライン上で2つの研究所の蔵書を統合したカタログがありますので, 会員はどこにいても研究計画を立てることが可能です。さらに, 電子リソースへのアクセスに関しては, 建物内でのワイヤレス接続の設置など, イギリスの大学関係者の期待に沿うよう努めています。また, 毎年, 図書館司書コースの学生を少なくとも1名は受け入れて研修の場を提供し, よりよい経験を積むために世界各地の図書館司書との交流を進めています。さらに, ヨーロッパの研究機関とも積極的に交流しており, とりわけドイツ考古学研究所とは, DyabolaプログラムとArchäologische Bibliographieの印刷版を基にオンライン上で世界中のドイツ考古学研究所を網羅したArchaeological Bibliographyを共同制作しています。BSAは海外の研究機関の中で唯一, 遺跡の詳細な地理学的なインデックスを使用しArchaiologikonDeltionのようなギリシアの考古学雑誌からの詳細な引用を含

むレファレンスを出版しているので、現在、新たなプログラムにこれらのデータをコンバートしているところです。

ところで、いくつかの点で、BSA の図書システムはイギリスのスタンダードとは異なっています。まず、BSA の会員は24時間図書室を使用できます。平日の業務時間用にも無料の利用チケットを発行していますが、250名ほどの正規会員が昼夜を問わず図書室を利用しています。次に、開架中の書籍に関しては、それが希少でかなり貴重なものにならない限り移動はしません。移動したのも、図書室の業務時間内であれば閲覧は可能です。イギリスの多くの大学図書館は出版時期を重要視し、5年以上経過したものは開架から外してしまう自然科学系のシステムを徐々に採用してきました。そのため、開架スペースで1つのアイデアについての研究史を紐解くことができる場所はとても珍しくなっています。もちろん、こうしたシステムは広い開架スペースを必要とします。2年前、あと12ヶ月で開架スペースが満杯になるという状況になりました。幸いなことに気前の良い寄贈者のおかげで、使用されていない地下室を130メートルほどの別翼に改装することができ、目下のところ、新しい建物を必要とするまで向こう10年間はしのぐことができるようになりました。このような建物の改造作業は、本来異なる時代の生活様式に合わせて造られた上記の建物の中で活動していく際に、私たちが直面する問題の1つを浮き彫りにしています。新しく造られた図書室はもともと、宿舎で生活していた研究者に従事する家政婦のために建てられたものでした。そのような役割がなくなって久しいため、このような改造作業は、現在使用されている宿泊施設のあらゆるスペースにもあてはまります。1895年に宿泊施設が建てられて以来、BSA の役割と学生たちのニーズや要望が大きく変化したことを考慮すると、少なからぬ成果であるといえるでしょう。

BSA では、実験室資料からクノッソスやアテネの博物館に納められた収集品、これからも拡大し続ける文書室にいたるまで、国際的に重要なコレクションを所有しています。文書室は発掘ノートを取めるための小さな倉庫から始まりましたが、その後屋根裏部屋に移されるまで量も増え、そして私たちにとってより重要な施設であることがわかり、現在は、引き続き国際的に重要な新しい資料を集める専門的な施設となっています。ここには、昨年のクリスマスの前に届いた、故ニコラス・コールドストリーム教授の学術論文や写

真が収められています。これらは燻蒸消毒後のもので、現在開封しているところです。これらの資料のカタログを作成し、2～3年後には写真類をデジタル化してオンラインで閲覧できるようになればと考えています。BSA の所有する資料の重要性について、もう1つ違った特色を示すとすると、ビザンツ研究基金(the Byzantine Research Fund) の資料について紹介しましょう。この基金は1908年、東地中海と中東におけるビザンツとフランクのモニュメントを研究するイギリス人建築家を支援し、その成果を出版するために創設されました。1880年代後半のイギリスで起こったゴシック様式、ネオ・ビザンツ様式の復活に大きく貢献したアーツ・アンド・クラフツ運動が、この時代の建築家たちの教育にも多大な影響を与えました。彼らはイタリア、ギリシア、トルコや中東にゴシックやビザンツ建築の起源を学ぶために派遣され、そうして得られたアイデアを、今度は自分たちの活動に還元させたのです。BSA はこの革新的な仕事に必要な制度上の基盤と、完璧な知的環境を提供しました。その成果が、現在保存作業とデジタル化を進めている3500枚以上にのぼる図面、写真、ノートになります。これは、オシオス・ルカス修道院の内部装飾の詳細をデジタル画像にしたものです。多くの場合、これらの画像が現存しない建物の唯一の記録となっています。例えばテッサロニキでは、旧ビザンツ時代の市街地の大半を焼き尽くした大火災(1917年)以前に、多くの建物についての記録が残されました。BSA では、例えば、アイオス・ディミトリオス教会内のモザイク画や壁画の唯一の記録を保存していますし、同様に、1920年代の大規模な再キリスト教化が始まる頃、イスラム統治時代の増築部分が取り外される前の元の位置にある様子を写した写真なども保存しています。このように文書室や美術館、実験室でBSA が所有する資料は豊富なため、現在すべての資料についてオンライン上のカタログを作成し、特に重要なものは個々にデジタル化し、オンライン上で検索可能なデータにすることがより重要であると感じています。これが主要な取り組みで、5年以内の完成を目指していますが、BSA の資料が国際的な研究のなかで適切な役割を担い、他の学問的に使用されているデータベースと十分にリンクされることが肝心となります。

研究所の考古学的活動

ここまでで、考古学についてはあまり言及してきま

せんでしたが、おそらくこの分野がBSAの活動でもっともよく知られたものでしょう。他の国の研究機関やギリシアの大学（また、実際は文化省外の施設）と同様、私たちの施設も年に最大6件の調査プロジェクトを申請することができます。そのうち3件はBSA単独で行うもので、のこり3件はギリシアの文化省との共同調査となっています。そのためイギリスの大学から申請を募り、許可の下りた発掘調査に対するコンペを行います。私たちは報告書の刊行についてアカデミーから厳しく監査されていますので、発掘調査に費やすことのできる期間は、研究・報告書出版の時期にはいるまでの3～4年間となっています。おそらく、必然的に、ギリシアのごく一部の地域と特定の大きな遺跡に注目が集まっているので、現在では、1つの海外の研究施設がまったく新しい場所での調査許可を得ることはきわめて難しくなっています。しかし、このような状況でもまだ素晴らしい展望が拓けています。この図は、2008年度の発掘プロジェクトで、現在継続中のものです。

こうした継続中の大規模な遺跡調査プロジェクトの中でも、BSAが1970年代を通して初期鉄器時代の墓域の調査を行い、床下から副葬品の豊かな2つの埋葬例が検出されたトゥンバの遺構で知られるレフカンディの調査は、もっとも良く知られた例でしょう。2005年から2008年にかけて、オックスフォード大学のイリーニ・レモスが、クセロポリスの集落の調査を再開し、そこから、祭祀跡ともっとも重要なLH IIICから初期鉄器時代へ連続するメガロン構造と、2つの時代のメガロンと関連があると思われる東側の別館を見つけています。2008年の夏には、メガロンの前に存在したLH IIIC大型の邸宅が見つかっています。この建物からは典型的な粘土製の貯蔵容器と小石を敷いた床面が見つかっており、部屋の配置も同時代の建物と同じものでした。邸宅は何らかの理由で放棄され、少し時期をあけた後に、これまでとは異なる長方形で南北に軸をもつプランのメガロン構造の住居が建てられました。この地からは、記念碑的な邸宅の出現という形で、エリート層が権力を誇示するために使った表現方法の変化を検討することができる多くの物証が見つかっています。後期青銅器時代の都市は、北側に入り口が位置し、低い地峡を横切ってクセロポリスの西部と東部にある2つの沼地の間を走る巨大な城壁で囲まれていました。すぐ近くには、テラコッタ製の人形（ボート型やケンタウロス像なども見つかっている）や、祭祀用の飲食跡などから、「祭祀ゾーン」と名付けた

一帯が広がっています。そこには、時期が連続する3件の建物A、B、Cがあり、その建物の内部や周辺には興味深い特徴が見られます。建物Aのそばには、赤い色の鹿の角が粘土製のドラムの上に置かれていました。建物Cの時期までには、内部と外部におかれた石製の台座の使用に変化が見られます。この一帯からも、近隣に位置するエリートの邸宅に関連する祭祀について多くの情報を得ることができます。

集約的なフィールド踏査は、1970年代以降BSAが特に力をいれて取り組んできた分野です。ここで紹介したい一例は、クノッソス溪谷を中心としています。同時に、BSAのクノッソス支部についても紹介できるでしょう。クノッソスでは、ミノス王の宮殿の内部や周辺部についての1世紀以上にも渡る調査が、アーサー・エヴァンズの自宅で現在はギリシア政府の所有物となっているヴィラ・アリアドネや、かつての守衛小屋、タベルナと呼ばれている、現在BSAがギリシア政府によって宿泊施設としての使用を許可されている建物、図書室や層位学博物館など、一連の施設を拠点に続けられてきました。クノッソスの支部は非常に幅広い作業の拠点でありましたが、ミノア時代の宮殿に特化した1つの遺跡に関する1世紀以上にわたる考古学調査であったため、必然的に、特定のエリアに偏った非常に断片的な報告書が残されました。Knossos Urban Landscape Projectは、ロンドン大学のトッド・ウィットロウ教授が率いるBSAのプロジェクトで、過去1世紀に宮殿内とクノッソス溪谷で行われた個々の発掘調査の成果と、イラクリオンの第23先史古典考古局との共同で行われた溪谷での新たな集約的踏査の成果を組み合わせることで、過去の調査の見直しと調査地の偏りをなくすことを目的としています。この地域一帯の7000年におよぶ都市発展の歴史を理解する試みには、もちろん学術的な意義もありますが、イラクリオンの郊外がクノッソス方面に急激に拡大しているという状況下においては、現存する考古学資料を保護し管理することは重要な課題となっています。そして、まさにこのような踏査こそ、施設維持といった長期のコミットメントなくして着手することが不可能な種類の調査であるということは強調するに値します。私たちは、発掘調査ごとにチームを派遣するミッション制度に反対する際に、海外の施設管理費の正当性についてしばしば問われます。長期のコミットメントとそれによって作られた結びつきが、なぜ質的に異なる調査を支えているのか、それは、クノッソスの調査がよく物語ってくれます。そして、このこと

は考古学の分野だけに留まりません。実際、クノッソスの施設は国際的な研究者のコミュニティーによって、いろいろなプロジェクトの中で利用されています。そして、その広範囲に及ぶコレクションは最前線の調査を支え続けているのです。この写真は、ラボで働く仲間の一人、アルギロ・ナフプリオティが、本土のギリシア人が青銅器時代のクレタ島へ移動した形跡があったのかどうかを調べるために、ストロンチウム同位体分析のプログラム用サンプリングを行っているところです。

Knossos Urban Survey に話を戻しますと、2006年の最初の調査では都市遺構に着目しました。2007年には、周辺の丘陵地にまで調査は及び、そこでは主に墓域の調査が行われました。2008年には、墓域や都市域に関連する周縁部での活動に使用されていたと考えられる現在調査が可能である地域全般にまで範囲が及びました。考古学ゾーンは、エリアス山の頂と北東部に丘陵地が延びる東部と、はるか南西部の両方に広がっています。ギリシアの土地管理制度はとても厳格なため（考古学ゾーンの中では建物の建設は不可能ですが、ゾーンの外では規制はほとんどありません）、ここでの目的は古代の遺跡の保護と、土地にかなりの圧力を与えてしまう開発への規制の両方に対し、現在の保護区域の境界線が妥当であるかどうかをチェックすることでした。南の地区での調査は、溪谷から、アイア・イリニの採石場の地上・地下に広がるローマ、ヴェネチア、オスマン・トルコ時代の導水管システムにまで及びました。採石場はいまだ十分な報告は為されていませんが、ミノア、ローマ、ヴェネチア時代の活動の跡が見られます。北部では、ポロスの港町まで広がっている先史時代の墓域が位置するケファラーイソパタの尾根上で、まだ開発が行われていない地区全域の調査が目的となっていました。先史時代以後、この地域の南部は都市域の北墓域となり、1950年代から1970年代のBSA 中心的な調査地となりました。現在はイラクリオン病院が建っています。調査範囲は先に調査が行われたカツアンバスの新石器時代の遺跡を含む国道を超えたところまで広がっていました。

今日まで、予備調査だけでも40万点以上の土器片が踏査中に見つかっていますが、このことはすでに、遺跡の発展についての私たちの認識を大きく変えるものです。都市の中心地について見てみましょう。全体的にこの地区は大きく3つの時代、前2千年紀、前1千年紀、後1千年紀に分けることができます。表面の土器片の分布密度を考慮すると、都市の中心はそれぞ

れの時代で、1平方キロメートルのうち最大約3/4の地域を集落地で覆われながら、徐々に北方へ移っていったことがわかります。先史時代について長い間調査が宮殿付近に集中してきた地区では、中期から後期青銅器時代の集落地全体のサイズに関するデータが記録されています。この遺跡はエーゲ海で最大の規模にあたり、東地中海周辺でも最大規模の都市遺構に匹敵します。2007年には、都市と付随する墓域の境目をより明らかにしました。初期原宮殿時代には、新石器時代のテルの北端に遺物が集中し、他の場所からはほとんど出土していないことから、最初の5千年紀の間は大きな集落地はテルの範囲内にとどまっていたことがわかりました。後期原宮殿時代については、宮殿に隣接するエリアの調査が難しいことを考えると、私たちが得られる物証は依然として緊急調査によるものとなり、そこでは初期の堆積層がMMIA 期のテルの外側に位置しています。他の地域では遺物が集中していないことから、前2000年頃、遺跡がテルの外側にまで拡大し、1平方キロメートルの1/4のエリアにまで広がったことがわかります。前2千年紀の前半には、共同体が急激に拡大し、新宮殿時代の終わりごろまでには1平方キロメートルの3/4のエリアにまで到達していました。調査データから得られた新たな情報から、宮殿の北部の調査がまだ行われていない場所と、西部に位置するアクロポリスの斜面、南部のギブサデスあたりまで、共同体が広がっていたことがわかりました。数多くの墓域が発掘され、最初に、遺跡を取り囲む丘陵地に造られた後期青銅器時代の後半のものが調査されました。2007年の調査では、すでに知られている墓の一群との溝を埋めることで、特にこの地域についての理解が深まりました。アクロポリスの西側と、ギブサデスの南に上ったところに、墓域が集中して作られたことから、居住地と埋葬地の間で、遺跡の末端が前後したのか、それとも、甕棺墓のような浅い埋葬地の大半が耕作によって破壊されてしまったと考えられます。

他の時代に関しても、原幾何学文様期からヘレニズム時代までの墓域の分布状況は、発掘調査で知られていた状況を大きく超えていました。遺跡の大きな発展がローマ人が入植するはるか前に完了していることは明らかであり、ヘレニズム時代のクレタにおける、クノッソス人の政治勢力の急激な拡大に結び付けることができるでしょう。より早い時期であっても、初期鉄器時代の墓域の幅広い分布状況から、早熟な豊かさや初期鉄器時代のクノッソスの東地中海とのつながり

が、初期の都市の発展と対になっていたと考えられます。発掘と調査データの補完性について言及しますと、ギブサデスの低いほうの斜面に位置する既に調査されていたデメテル聖域は、長い間、町から離れたところに建てられたものと考えられてきました。現在では、土偶の破片が1ヘクタール以上もの広い範囲に分布し、また、丘の斜面に古典期とヘレニズム時代の土器片がかなり集中していることから、かなり大規模な集落がこの丘に存在していたという状況に、この聖域を当てはめることができます。

最後の目立った居住時期であるローマ時代の遺物がこの地を覆っていることは決して意外なことではありません。とはいえ、ローマ時代の物質文化の多様性からは、この共同体の空間的な組織についても、一定の見通しを立てることが可能です。既知のローマ時代のモザイクは、直線状に分布しており、もしかすると都市の大通りに沿って敷かれていたと思われるかもしれません。しかし、これは緊急発掘による人為的な結果です。主に黒と白のモザイクのテッセラは、ローマ時代の都市域中央の北部に幅広く分布しています。より小さな青色や場合によっては緑色のガラス製のテッセラは他よりも固まった分布の仕方をしていることから、特に豪華な装飾を施した建物の一群を表しているのかもしれませんが。大部分が調査されたディオニュソスの館は、極めて裕福な家族の私邸の典型的な例です。モザイク画のテッセラのような物証は、大理石製の化粧板と同じように、ローマ時代の地中海各地から輸入されていましたが、ガラスの存在（その半分は窓用のガラスですが）は、都市域中央の北部にきわめて裕福な階層が居住していたことを示しています。これ以外にも、輸入された石臼や、製鉄作業の残骸などが集中している区域が、テッセラや化粧板が出土したところから離れた場所に位置していることなどから、ローマ時代の都市の空間構造がいかなるものであったかわかるでしょう。

ローマ時代末期のクノッソスについては長らく不明な点が多く、かろうじて3世紀から7世紀にかけての墓が知られるのみで、宮殿に比較的近いエリアで行われた表土の除去作業からごく僅かの土器片が見つかったただけでした。しかし、踏査によって、現在では中心的な発掘地から離れた北西部からもローマ時代末期から古代末期の土器が見つかっています。この時期の都市も、イラクリオンへのルートにアクセスするために、引き続き長期にわたって北向きの傾向が見られます。現在、ローマ末期とビザンツ時代の教会と

それに付随した墓域で確定されたエリア内に、かなり大きな共同体が存在していたことがわかっています。

これらの調査は中心地についてのものでしたが、より幅広い溪谷全体については、どのようなことがわかるのでしょうか？ 2008年の調査データによると、分析されたすべてのユニットから土器がまとまって出土していることから、都市遺構の広がりや範囲を確定することができ、それぞれの時代で都市域の範囲外に分布している遺物はわずかでした。先史時代の遺物の分布状況から、都市のすぐ東に位置するエリアスの丘の北部に、すでに知られている独立した集落を確定することができ、いくつか分布状況がまばらな地点は、おそらく広範な墓域であると思われます。踏査によって数多くの墓を発見することを期待していたわけではありませんが、多くの地点がさらなる調査を行うに値します。そして、ケラトス川上流の、ケファラからイソパタに続く尾根の西側斜面に沿って先史時代の遺物が点在している様子から、おそらく墓の堆積物が侵食されたか、または掘り起こされたと考えられます。原幾何学文様期からヘレニズム時代にかけて、都市域は再び大規模になってきます。南部の丘陵地にはとりわけ、少数の遺物の集まりが数多く点在していることから、都市から離れたところに農場があったと思われます。ローマ時代に入ると、周縁部に点在する少数の遺構は、岩肌に取り込まれた墓に付随する、小規模の村落や農地であったと考えられます。そのうち2〜3件の遺構は、農場よりも、郊外の邸宅のような特徴をもっていました。ポスト・ローマ期の遺物の出土状況からは、溪谷内のどこにも大規模な集落が存在していなかったことがわかりますが、北西部とケファラ-イソパタ間の尾根に沿った一帯に遺物が偏在している点は、ヴェネチア時代のカンディアが包囲された間、この一帯にオスマン・トルコ軍が広い範囲で野営をしていた状況と一致します。現在、踏査はすでに完了し、来るべき2つの研究シーズンで、専門家による調査に備えてすべての出土品を記録化することに専念することになりますが、この都市遺跡の長期に渡る役割についての理解に、この一連のプログラムが与えたインパクトはすでに確認することができたと思います。

文化遺産の保護

BSAが緊急調査に参加することは法律上許されていませんが、遺跡の管理や公開などを重要視する広範囲に及ぶプロジェクトには着手しています。この点

が、省庁との共同調査の主な目的となっています。というのも、ここ数年のギリシア考古学界では遺跡の管理、すなわち、過去のデータが現代の基準に合うように刊行され、新しい調査の計画に組み込まれるようにするのと同じように、遺跡を保護し修復プランを決定し、遺跡やモニュメントを適切に保存して提示するための知識を得ることの重要性がたびたび問われるようになってきたからです。そしてBSAはこの動きの中で大きな役割を果たしています。なぜなら、1つには発掘調査から125年以上たち、果たすべき道義的責任が私たちにも少なからずあるという理由からであり、もう1つは、学問的な必要性和イギリス内での検討課題や研究問題に一致するからです。さらに、この動きによって、国の各地に保管された過去の出土品だけでなく、文書室や美術館の所有物などすべてを動員して、1つの機関として私たちが所有する文化遺産や資料を大いに活用することが可能となるからです。私たちが過去2年間でどのようにこの種の仕事を行ってきたのか、3つの異なる例を挙げて説明しましょう。

まずは、スパルタでの私自身のプロジェクトについて紹介します。2007年に、古代劇場の適切な修復と公開のための調査を完了させるために、先史時代、古典期、ビザンツ時代に関する考古局と5年間の共同研究を始めました。この劇場は規模だけでなく、ギリシアにおける初期のローマ時代の劇場へと変換する過程の、高度で革新的なヘレニズム時代の舞台を備えた素晴らしいものです。BSAと考古局が1世紀以上もの間調査してきたにもかかわらず、劇場自体や、観客席の中に建てられたローマ末期とビザンツ時代の集落について学ぶことがたくさんあります。どんなモニュメントであっても一般公開するためには、遺跡を使用したり、修復したりするのはもちろんのこと、後代の遺構を発掘し取り除かなくてははいけません。BSAは劇場内の発掘を20世紀初頭に2回行う機会がありました。調査は1905年以降と、1921年から1927年に行われたのですが、当時の調査では一般的であったように、古代末期の遺構は記録が十分に残されないまま撤去されており、そのほとんどが現存していません。1990年代に、最後の調査が組織的に行われ、舞台の端に建てられた8世紀から12世紀の住居群の一部に関する報告書を作成しました。しかし、この発掘を完了させ、劇場の図のなかで目立ってしまっているこの集落遺構を取り除くことが私たちの課題となっています。古代の劇場で一般的に見られるように、後代に使用されたのは、舞台の平らな部分と背後のモニュメン

ト部分（この場合はアクロポリス上）に集中しています。これについても、さまざまな活動時期におけるより細かな年代決定を行いたいと思っています。さらに問題となってくるのは、中間の観客席内の活動範囲についてです。この集落は、通路と現存する壁とで行き止まりとなっていたのか、それともこの一帯をまたぐように広がっていたのでしょうか？2007年に、発掘調査を視野に入れながら観客席内に残る古代末期の遺構をたどる作業をし、遺跡を早急に保存する必要があるのかどうか見極め、今後のプログラムに適切に取り込んでいくための確認作業をしました。地形学的調査と比抵抗探査を組み合わせた結果、遺構は広範囲にわたって劇場の座席に沿っていることが明らかになりました（とはいえ、座席用のブロックが原位置を保っていることを示す証拠はないのですが）。さらに、建物の位置もおそらくビザンツ時代の集落と関連していたようです。2008年に最初の調査シーズンを終え、その後、アクロポリス上の古典期末期の集落の南西端の位置を突き止め、さらに、1990年代に部分的に調査された舞台の西側の上に建てられた住宅の北端を確定させるために、凹部の中段と上段の西側の調査に取り組みました。少なくとも西側凹部には通路と支え壁があったということがわかった点は修復上の疑問を解く重要な発見となりましたが、地下の抵抗の測定結果に見られた不規則なパターンは、他の宗教的施設を伴わない孤立したビザンツ中期の埋葬室であることが判明しました。ここには、少なくとも23名の男性、女性、子供の遺体が12世紀の中で4段階に分かれて堆積していました。これは納骨堂として建てられたように見えますが、その後すぐ埋葬地として再利用され、最終的には大規模な建設プログラムの準備のためにアクロポリスから掘り出された墓地に残っていたものを納めておく穴であったと考えられます。私たちの発掘調査では、概して、アクロポリス上の集落時期を、5世紀後期～6世紀、8世紀～10世紀、12世紀～13世紀という年代に振り分けることができ、さらにアテナ・カルコイコス初期の聖域から大量の奉納品が見つかりました（中には、オリンピア競技会の優勝者によってアテナへ奉納されたと思われる異例に長い韻文が刻まれた前6世紀後期～前5世紀初期ごろの石製のハルテールもあります）。

2番目のプロジェクトについては、4年近くを隔ててこの夏から再開することになっていますので、手短かに紹介するにとどめます。1960年代にBSAのチームは、ラコニアのネアポリス沖に位置するパヴロプテリ

の青銅器時代の水没遺跡について部分的に調査を行いました。発掘するには至りませんでした。それから40年を経て、ミケーネ時代の大規模な墓地が発見されたこの海岸線は開発の危険にさらされ、遺跡上で野放しに行われるダイビングなどの活動が遺跡を破壊しつつあったばかりではなく、堆積作用の変化が遺跡の可視性と保存状態に影響を与えるようになっていました。私たちは2009年に調査を再開し、考古学者と海洋学者で編成したチームで遺跡一帯の大規模な超音波探知機による調査と発掘調査を行い、それらで得られた成果を、より長い期間での遺跡保存を考慮するのに役立つと思われる潮の流れや浸食作用のデータと統合することを提案しました。こうしてこの地での調査に復帰したことを、私たちは二重で喜んでいました。というのも、私たちの目的の1つは、より大きな全体像を得るために自分たちのプロジェクトを1つの地域という枠組みに組み込むことだからです。そして、パヴロプテリの中遺跡は、私たちが青銅器時代の遺跡を発掘し調査したキュテラとラコニア南部（ここでも多くの調査がなされました）とを結ぶ港であったと考えられるからです。

最後に、地球物理学的手法は、時間的にも予算的にも発掘が難しい規模の遺跡について、その広がりや空間構造を知ることによって遺跡のゾーンを確定し保護するにあたり、もっとも重要な方法であるといえるでしょう。2007年は、地球物理学分野の名誉会員であるマイケル・ボイドが率いるボイオティアのプラタイアの国際的調査の最終年にあたっていました。2006年に、調査チームはそれまで位置が知られていなかったアゴラを特定し、さらに、いくつかの公共建造物と住居の街区を発見しました。2007年の調査では、さらに調査地が10ヘクタール分拡張され、このプロジェクトがカバーする調査面積は全部で22ヘクタールになりました。アクロポリス上で大規模な調査が行われるのと同時に、アゴラの探査を完了させるために集中的な作業が行われました。その結果、現在ではアゴラの中央部と劇場のブロックのそばに位置する13m×7mの2つの小さなイン・アンティス式の神殿が見つっています。アゴラは、これらの神殿の他に南西の角に大型の公共建築物や公的モニュメントなどがある183m×127mのオープンスペースであったと想定されています。北端には大がかりな門が建てられ、アゴラの西側はデータから明らかなように列柱館で縁取られていました。アクロポリスでは、5つの街区が完全に調査され、さらに14の街区が部分的に調査されています。

中央の街区は異例の長さを持ち、その南面は最大10mも幅のある道路に接していました。この大きな道路は東に向かって延び、アゴラの北端を画しています。あちこちで住宅跡を詳細に識別することができました。教会もいくつか見つかり、中央の細長いブロックには、さらに大型の建物があったと考えられます。城壁で囲まれたエリアの約1/4を調査したことで、調査チームは、遺跡の中の居住されたエリアの大部分を相当程度明らかにしたといえるでしょう。

フィッチ・ラボラトリ

地球物理学に言及したところで、理化学的な手法で考古学的研究を進めているBSAのフィッチ・ラボラトリについてお話することにしましょう。この施設は1974年に、故マーク・フィッチの支援によって設立されたもので、資料（胎土分析や化学分析を通じた土器の研究が中心ですが、金属製品も扱います）を分析するセンターを作り、分析結果と現場での成果との間で対話を重ね、互いの成果を統合することを目的としています。程なくして研究の射程は環境学（ここには骨や種などのリファレンス資料が豊富に揃えられています）や地球物理学の分野にまで拡大し、現在このラボラトリはこの分野におけるギリシアでもっとも活発な研究所の1つになっています。その後の30年のあいだに、異なる分野の対話というレベルを超えて、フィッチ・ラボラトリで提供される様々な技術は標準的な考古学プロジェクトを構成する不可欠の要素となっており、その顕著な特徴は考古学的な問題と科学的な手法とを継ぎ目なく統合するところにあるといえます。設立当初は、当時もっとも一般的な関心を集めていた産地同定に関する問題に取り組むことが多く、そのため考古局のスタッフを含む様々な研究者から分析資料が持ち込まれていました。しかし、このようなラボの位置づけは、インパクトにおいても学術的な質においても多様な仕事を生み出すことになったため（他の研究者の研究計画に与える影響力が大きくなったので）、私たちは少数の大がかりなプロジェクトだけに絞って、そこではラボのスタッフがきちんと共同研究者となり、事前にロンドンの実験科学諮問委員会からの承認を得るようなシステムに移行しました。私たちは3年間に2名のフェローを雇っているのです。彼らは1年から3年の時限プロジェクトを発展させ、それにより、彼らが異なる分野からの優れた調査計画の発展に関与し、よりインパクトのある結果を生み出せるよ

うになることを望んでいます。できる限り、これらのプロジェクトは、BSA の行う主要なフィールド・プロジェクトの一部を構成したり、考古局や大学の共同研究者が行う調査、さらにはギリシア国内で活動する他の海外の研究機関の調査の一環として行われることが期待されています。実際、フィッチ・ラボでの研究は、私たちが行っているあらゆる調査に広がっているのです。このスライドでは、過去に行われた調査の地理的範囲を示しています。ギリシアには他に大きな科学センターが2箇所あり、1つは、アメリカの古典学研究所 (the American School of Classical Studies)、もう1つは、ギリシアの国立科学研究所 (the Greek National Center for Science Research) で、それらの施設に対し、私たちは競合するのではなくむしろ相互補完的であり、共同調査者たちが自らの関心に応じて適切なチームを選択できるよう努めています。またこれら3つの施設間で共同セミナーも開催しています。客員研究員がラボで作業を行うことも受け入れられており、彼らの多くはかつてのフェローです。というのも、彼らは考古学や遺跡保存学の分野において、研究職への極めて高い就職率を誇ってきているためです (現在は世界中のポストの約90%を占めています)。しかし、彼らの研究もラボ自体の研究上のプライオリティに含まれていないといけません。そして、今年創設した Senior Visiting Fellowship は、既にアカデミックなポストに就いている研究者に3ヶ月間研究に従事することを可能とさせるもので、歓迎すべき進歩の1つに数えられます。なぜなら、この制度によってイギリスの大学との関係が維持されるばかりではなく、若手のフェローを最新の研究に触れさせることで、彼らが自分たちのプロジェクトを終えて就職活動を開始する際にも役立つからです。

このアプローチが実際どのように機能しているのか、別の調査プログラムであるキュテラ島プロジェクトでの最近の研究を例に見てみることにしましょう。このプロジェクトは、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジのシプリアン・ブルードバンク博士とフィッチ・ラボ所長ヴァンゲリオ・キリアツィ氏との共同調査として行われたものです。キリアツィ氏は、表面踏査で見つかった遺物の可能性を明らかにする上で、科学技術をどのように応用するかを研究課題としています。彼女の研究では、調査エリア内での研究に使用する参照用に、複数の時期にまたがるカストリ遺跡から出土した土器の分析を行っています。並行して、詳細な記録取りと島内で収集できる原材料のサン

プリングを行い、その後ラボで比較分析が行われます。そして、古代の陶工が実際どのような配合で土器を作成したのかを理解するために実験的なレプリカ作成を行います。この作業は、並行して行われた島内で伝統的な制作方法を採用している現代の陶工の研究によってよりいっそう優れた結果をもたらしました (そして、過去30年BSAが行ってきた伝統技術に関する研究と現在急激に減少している職人についての人類学的な研究成果も忘れてはなりません)。これらの個々の研究を複合することによって、踏査でみつかった様々な時代の200件近くの遺跡から出土した調査土器の研究に有益な情報が提供されます。ほんの小さな特徴のない土器片についても胎土に基づく年代決定が可能になるだけではなく、搬入土器の好みの変化や新しい技術の導入を跡づけると同時に、キュテラ島内の異なる土器制作工房の位置や、それらの工房の製品の島内外での分布を同定することができます。キュテラ島プロジェクトが終了したので、近隣のアンティキュテラ島の表採で得られた遺物にも同じアプローチが試され、とても有望な結果が得られています。在地の土器製作は、近隣エリアからの搬入品の使用と同時に、早くも紀元前3千年紀には始まりました。在地の土器の伝統的な制作方法や搬入土器の傾向に関する通時的研究は、キュテラ島、クレタ島、そしてギリシア本土の発展に関連するアンティキュテラ島の変化に洞察を与えてくれます。キュテラ島とアンティキュテラ島というクレタ島とペロポネソス半島との間に浮かぶ2つの飛び石のような島は、エーゲ海の入りに位置し、相互の地理的なつながりは明らかであるにもかかわらず、いつの時代も同じ軌跡をたどったわけではありません。表面踏査で採集される土器片は、周知のように多くが磨耗し破損しているため、遺跡の年代決定や性格付けにあたっては数少ない特徴的な破片に頼らざるをえないのが実情でした。しかしこの新たなアプローチによって、私たちは異なる根拠からはるかに多くの資料に基づいて考察することが可能となり、あまり望みがなさそうな資料を利用する方法に変革がもたらされると同時に、より説得力のある結論が導かれるようになっていくのです。

BSA の多様な活動

最後に、BSAで行っている考古学以外の活動について少し紹介したいと思います。というのも、イギリス学士院が私たちに課している任務は、あらゆる分野

の人文学研究に及んでいるからです。実は、BSA にはこの点に関する長い伝統があり、少なくともイギリスで学問上の境界がかなり流動的であった20世紀前半には、ギリシアで自分に関心のある研究を発展させれば、それが結果的に祖国でのアカデミックなポストの獲得に繋がりました。こうして、スパルタの劇場の発掘者としては私の遠い先輩にあたる R. M. ドーキンスは現代ギリシアの詩に魅了され、コンスタンティノス・カヴァフィとそのサークルの親友であり支持者となって、最終的にオックスフォード大学現代ギリシア語学科のバイウォーター・サザビー講座教授としてそのキャリアを終えました。今ではこのようなことは不可能だとしても、これまで見てきたように、研究所がさまざまな時代の美術や民族学、言語学を網羅した文書資料を所持しています。このスライドが示しているように、線文字 B の翻訳から、3 年前に提出されたギリシア語でのテキスト・メッセージングの言語に関するすぐれた博士論文まで、あらゆるレベルで主要な研究と関係しているのです。しかし、このような分野の研究者との関係が、考古学者との関係とは異なる形をとることも事実です。ギリシアの法律では、考古学者は許可を得るため BSA を通じて活動する必要がありますが、言語学者、歴史学者、人類学者は自分たちのコネクションで活動することができ、時にギリシアに関する題材に没頭する必要がある際にはイギリス的な環境をあえて避けて、より自由に行ったり来たりすることができます。そのため、新たな調査を行ったり促したりすることはアテネに拠点を置く私たちにとってより大変になってきており、彼ら専門家に対して研究のふさわしい時点で利用すべき資料がこの研究所にあることに注意を喚起する努力を怠らないようにしています。このことは、いかなる海外研究機関も母国における支援体制に大きく依存せざるをえないという、より全般的な論題に関わっています。BSA は評議会によって運営されており、私には代表執行役として評議会に対して報告する義務があります。過去数十年は諮問委員会のシステムはむしろ緩やかなものでしたが、現在では考古学部門、財政および多目的部門 (BSA はギリシアとイギリスの法に従いながら多岐にわたる責任を伴う慈善事業をおこなっているのです)、そして、社会・芸術・文学部門という3つの部門ごとに大がかりな諮問機関を設ける改革が進んでいます。最後の、社会・芸術・文学部門の設立は、これらの分野の研究者がイギリスを拠点としたフォーラムを設け、研究者間の交流を図り、彼らが BSA の存在を心

に留め、プロジェクトを適切な時期に私たちのもとに提出するための試みです。このような連携を進めることは、私たちの成功を継続するための鍵となります。そして成功を継続することは、とても重要なのです。というのも、私たちイギリスの人文系の研究所は、常に現代社会と現代の主要な政治問題との関連を明らかにすることを厳しく求められており、人文学の成果がそれらの問題に応える上で役に立つのだということをアピールする必要に迫られているからです。このことは、かなりの (おそらく遺憾なほどの) 程度で、私たちの仕事の幅広さと、現代社会への関与の程度に関する問題として読み替えられています。だからこそ、私たちは過去が現代への重要な教訓であると主張しなければならず、どうしてそうであるかを示すために戦わなくてはならないのです。

ここでも、ひょっとするともっとも重要な点は、BSA がこうした人文学の諸分野の専門家たちに、かけがえのない長期的な研究のための拠点や中立的な環境でコネクションを作る場を提供することができるという点です (そして今回の講演で繰り返し述べているように、私の主要な業務の1つは研究者を互いに結びつけることなのです)。2008年と2009年の客員研究員であるオックスフォード大学のルネ・ハーショ博士とマーガレット・ケンナ教授は、自分たちの昔のフィールドのデータを再検討し、40年前に行った最初の調査エリアを再訪問するというプロジェクトに取り組んでいる社会人類学者です。ルネの研究は、彼女が1970年代に調査を行ったコキニアやニカイアといったアテネ郊外を舞台に、小アジアのカタストロフによって移り住んできた難民のコミュニティに焦点を当てたものです。30年後にこれらの家族や土地を再訪することで、彼女は、移民のアイデンティティ認識の変遷から、移民コミュニティへの他民族の移民の受け入れに至る問題や、社会的諸関係を明確化する建築の流行形態といった一連の問題を検討することになりました。彼女の仕事を通して、私たちはギリシアへの新しい様々な移民を構成する民族集団、とりわけインド亜大陸からの集団に関するイギリスの専門家と、イオニアやバルカンへの移民により関心をよせるギリシアの専門家、そして移民問題に取り組む現代ギリシアの政治家を結びつけることになりました。

芸術部門は、BSA がイギリスの芸術「ビジネス」の重要な局面をサポートすることのできるもう1つの分野で、私たちのパトロンであるチャールズ皇太子がもっとも関心を払っているものです。2002年の設立

以来、芸術分野を対象とした奨学制度、the Prince of Wales Bursary for the Arts は、BSA の後援のもと、非常に様々な外観の才能あふれる芸術家たちをギリシアへ招聘してきました。彼らは完全に自由に調査プログラムを遂行することができ、その多くはギリシアにおける芸術的関心の中でもより伝統的な分野——例えば景観研究と古代芸術研究——に従事する傾向があるのですが、最終的にはとても卓越した刺激的な作品を発表してきています。コーンウォールで開かれたエデン・プロジェクト用に発注された彫刻は、BSA で大部分が設計されました。現在 BSA では、7 番目の奨学金受賞者でスレイド美術学校を卒業し、これまでロンドンを拠点に活躍していた画家のガイ・ルーシャを迎えたばかりのところですよ。彼は、油絵、木炭画、木材や粘土といった伝統的な材料を用いて、キュービズムを基にした実験的作品を制作しています。ガイは、BSA にとってアテネを拠点に制作活動を行う最初の芸術家で、彼の作品は現代のアテネの街からインスパイアされています。そして私たちにとっても、芸術家とともに過ごすことはまったく新しい経験となっています。

将来への展望

以上が、BSA とはいかなる施設であり、現在どのような活動をおこなっているのかの紹介でした。それでは、将来についてはどうでしょうか。もっとも差し迫った重要な課題は、ヨーロッパ諸国やそれ以外の国々との国際的な連携を通じて私たちの研究の射程を拡大し、これらの連携を通じてのみ未来が拓かれること、そしてその際に言語の違いが障壁となってしまう点を確認することです。ヨーロッパのレベルでは、すでに述べたように、ドイツの研究所とは Archaeological Bibliography 作成を、またフランスの研究所とは Archaeological Reports と BCH の年報とを統合してオンライン検索を可能にすることなどの試みを共同で進めています。50 年以上の間、英・仏の研究所はともにギリシアで進行中の考古学調査について詳細な報告書を作成してきました。Archaeological Report は毎年刊行されるため、その編集はダイレクターとアシスタント・ダイレクターにとって大きな負担となっていますが、その情報の正確さと質の高さには定評があるため、私たちは刊行に責任を感じています。私たちはこの作業を継続するつもりですが、一方で、2 つの研究所がまったく同じような内容のものを

単に異なる言語で作成するというのは合理的ではありません。この種の出版物をとりわけ必要とする読者の多くが、一般的に電子リソースに依存していることは、私たちも十分承知しています。トルコやバルカンの新しい大学では、良質の伝統的な図書館を利用することができないため、電子リソースの利用を進めています。ですから、私たちも現在彼らが必要とする情報を提供することで未来の BSA のメンバーを育てることになるという戦略的な必要性にも気を配っていますし、また、そうした情報を彼らが望む形で提供することは、私たちの施設にとっても実用的かつ経済的にも意味があることとなります。より広範なレベルでは、BSA は海外とのつながりを育み、海外からの研究者を受け入れてきた長い歴史があります。彼らの多くはその後、自国の研究所（アイルランド、オーストラリア、カナダなど）の設立に取り組んできましたが、依然として私たちの図書館のような施設を利用しています。これまでの日本との関係もこのような形で発展していけば素晴らしいことでしょう。

みなさんの関心が考古学にあらうと教育にあらうと、以上のような多岐にわたる考えのどこかに興味を持っていただければ幸いです。みなさんのもっとも興味のある点について質問に答え、議論を展開することができればと思います。考古学に興味のある方で、私たちの最新成果について知りたい方には、Archaeological Reports の最新号をお渡しします。また、明日の講演では BSA を通じて行った私自身のプロジェクトであるイタカ島での調査について報告いたします。ですからこの場では、BSA に関する質問に答えて、今日の報告を締めくくりたいと思います。ニュースの見出しを飾るような大発見が、これから先にもあるのでしょうか？ めったにはありませんが、それでもそういった発見はあります。キクラデス諸島のナクソス島近隣に位置するケロス島は、キクラデス諸島の青銅器時代に作られた石偶の材料となる大理石の産出地として長い間知られていました。これらの石偶は多くが美術品市場に出回っており、その多くが盗掘され考古学的なコンテキストを失っていました。2006 年から 2008 年まで、コリン・レンフリーがケロス島のカヴォス半島と、その向かいにあるダスカリオという小島の調査を行いました。カヴォス半島では、大理石製の鉢とキクラデス文化の石偶が出土した 2 つの巨大な堆積層が見つかりました。石偶の数は現在 350 個以上にのぼり、キクラデス諸島すべての島で調査された墓域から出土した石偶の総数を超えています。これ

らの石偶はみな故意に割られており（接合する個体がほとんどないことから、石偶はこの土地に運ばれる前に割られていたのだと考えられます）、何度も彩色を施されていたことから、多くの石偶は明らかに出土地点に置かれる前に長期間使用されていたようです。これらの遺構は祭祀跡で、キクラデス諸島の各地からもたらされた石偶が、役目を終えてたどり着く土地であったと考えられます。カヴォス半島には埋葬跡や集落跡がなく、このエリアはいわば先史時代のデロスのような聖域だったようです。適切に調査・研究がなされれば、これらの遺物はキクラデス諸島の物質文化について、また、島民がさまざまな種類の表象関係を確立・発展させるために用いた方法についての再評価を可能にするでしょう。

驚くべき発見は続きます。約7000平方メートルほどのダスカリオ島を発掘してみると、コンテキストを保った貴重な金属製品と共に、これまで知られていた中で最大規模の集落が姿を現しました。ここは初期青

銅器時代のキクラデス諸島のもっとも重要な集落だったのです。発掘では、尾根に沿って南北16メートルもある建造物が見つかった山頂エリアに焦点が当てられました。この建物は同時代のキクラデス諸島で作られた中で最大のものです。ここでも祭祀に関連すると思われる遺構は見つかっていますが、出土した遺物や遺構の外観はカヴォス聖域のものとは異なっており、明らかに2つの遺跡の関係が単純なものではなかったことがわかります。これらはまだほんの始まりに過ぎません。発掘調査は昨年6月に完了し、現在はナクソス島の博物館で研究が続けられています。現在、明るみになりつつあるものは、実に胸を躍らせる発見であり、初期のキクラデス諸島の理解を変えるようなものなのです。

それではBSAの最新の研究について紹介したところで、今回の講演を終わろうと思います。ご静聴ありがとうございました。